

博士学位論文

近現代日本語表現の研究

—コミュニケーション機能表現を中心に—

立教大学大学院 文学研究科

高澤 信子

目次

序章

第1節 表現研究の目的	1
第2節 先行研究	4
第3節 主たる調査対象	11

第1部 コミュニケーション機能表現の変遷

第1章 依頼表現	17
第1節 「依頼表現」と「要求表現」	18
第2節 「もらえる」形—「てもらえないか」	26
第3節 「ください」形—「てください」「てくださいませんか」	29
第4節 「いただける」形—「ていただけますか」「ていただけませんか」	32
第5節 「ほしい・たい」形—「～てもらいたい」「ていただきたい」	37
第6節 「許可求め表現」と「依頼表現」	57
第7節 分析結果と考察	64
第2章 誘い表現	72
第1節 はじめに	72
第2節 江戸語の「誘い表現」—「およんなさいまし」「おいであそばし」	75
第3節 明治以降の「誘い表現」—「おいでなされ」「おいでなさい」	76
第4節 「申し出表現」	81
第5節 分析結果と考察	88
第3章 勧め表現	90
第1節 「勧め表現」の文型	90
第2節 江戸期の「勧め表現」	95
第3節 明治期の「勧め表現」	99
第4節 大正期の「勧め表現」	103
第5節 「助言与え表現」と「勧め表現」	105
第6節 分析結果と考察	110
第4章 指示・命令表現	112
第1節 はじめに	112
第2節 江戸語の「指示・命令表現」	115

第3節 明治期の「指示・命令表現」	130
第4節 大正期・昭和期・平成期の「指示・命令表現」	134
第5節 分析結果と考察	138
第2部 敬語表現	
第1章 「～させていただきます」	141
第1節 はじめに	141
第2節 「させていただきます」	142
第3節 「させていただく」	143
第4節 「させていただきます」の史的考察	145
第5節 平成期における敬語表現	147
第6節 分析結果と考察	162
第2章 「あそばせことば」について	165
第1節 はじめに	165
第2節 先行研究と問題の所在	167
第3節 「あそばす系尊敬語」用法の変遷	169
第4章 用例と考察	172
第5節 男性が使う「高貴な—あそばせことば」について	195
第6節 まとめ	199
第3章 「～ませんか」考	204
第1節 はじめに	204
第2節 江戸語の「ませんか」	205
第3節 明治・大正期の「ませんか」	209
第4節 分析結果と考察	214
終章 おわりに	216
引用文献	222
参考文献	225

＜博士論文要約＞

序章

1 表現研究の目的

本研究では、敬語表現を多く使用する必要がある表現、「依頼表現」「誘い表現」「勧め表現」「指示・命令表現」、および「許可求め表現」「申し出表現」「助言与え表現」、また、文末に用いられる「させていただきます」、「あそばせことば」、「ませんか」を取りあげて、「いつごろから用いられたか」「どのような場面で用いられたか」「どのような人たちによって用いられていたか」など、位相の面から調査するとともに、明治期を中心に、江戸語・東京語を対象として、江戸時代後期から現代までの、それぞれの時代の使用状況を調査分析し、各時代どのような変遷を経て現在に至っているのかを明らかにした。また、それぞれの表現を、「誰が行動するのか」「誰に決定権があるのか」「誰のためか」という観点から見て調査分析を行った。このことから、表現を次のように分けて調査した。

- | | |
|-----------------|----------------|
| (1) 依頼表現と許可求め表現 | (2) 誘い表現と申し出表現 |
| (3) 勧め表現と助言与え表現 | (4) 指示・命令表現 |

2 表現に関する先行研究

敬語の研究では、辻村敏樹（1968）『敬語の史的研究』、小島俊夫（1974）『後期江戸ことばの敬語体系』、小松寿雄（1985）『江戸時代の国語 江戸語』、小島俊夫（1988）『日本敬語史研究』、松村明（1957）『江戸語・東京語の研究』、林四郎・南不二男（1973）『近世の敬語』・（1973）『現代の敬語』・（1974）『明治大正時代の敬語』、田中章夫（2001）『近代日本語の文法と表現』、飛田良文（2006）『江戸語研究』、土屋信一（2009）『江戸・東京語研究』、国立国語研究所（1957）『敬語と敬語意識』がある。敬語・表現研究では、菊地康人（1997）『敬語』、蒲谷宏他（1998）『敬語表現』、森田良行・松木正恵（1998）『日本語表現文型』、飛田良文・佐藤武義（2001）『現代日本語講座』等がある。

先行研究では、「依頼表現」「誘い表現」「勧め表現」「指示・命令表現」等それぞれの表現、「させていただきます」「あそばせことば」「ませんか」等について江戸後期・明治・大正・昭和・平成期と時代を通した研究はされていない。

3 主たる調査対象

【江戸期】『遊子方言』（1770）、『金々先生栄花夢』（1775）、『江戸生艶気樺焼』（1785）、『通言総籙』（1787）、『傾城買二筋道』（1798）、『東海道中膝栗毛』（1802）、『浮世風呂』（1809）、『春色梅兒誉美』（1832）、『仮名文章娘節用』（1833）、『春色恋廻染分解』（1834）、『SENTENCE IN ENGLISH and JAPANESE COLLOQUIAL』（1863）

【明治期】『安愚楽鍋』（1872）、『KUAIWA HEN』（1873）、『女学雑誌』（1894・1895 コーパス）、『女学世界』（1909 コーパス）、『太陽』（1895-1925 コーパス）、『明治の文豪』（CD-ROM）

【大正期】『女性』（1922-1928 大正）、『婦人公論』（1925 大正・昭和・平成）、『太陽』（1895-1925

CD-ROM)、『大正の文豪』(CD-ROM)

【昭和期】『朝日新聞』、『読売新聞』、『新潮文庫の100冊 CD-ROM』

これまで調査対象にされてこなかった「外国人資料」「婦人雑誌」等も調査対象資料として用いた。

第1部 コミュニケーション機能表現の変遷

第1部では、コミュニケーション機能表現の変遷について明らかにした。

第1章 依頼表現

依頼表現では、「てくれないか」「てもらえないか」「てください」「てくださいますか」、「てちょうだい」「てほしい」「てもらいたい」「ていただきたい」等について調査した。また、『日本国語大辞典』に記載のない「ておくれ」についても言及した。直接的な表現である「てくれ」「てください」から間接的な表現「てくれますか」「てくださいますか」へ、また、否定疑問形へと現代に近づくに従って変化していた。「ておくれ」は、資料から初対面の人へ話しかけるのに丁寧さを表すために、用いられていた。

また、「依頼表現」と同じ表現が用いられる「許可求め表現」との関係についても言及した。現代語でよく用いられる典型的な「許可求め表現」である「ていただけますか」は江戸期・明治期・大正期では用いられず、「てくださいませんか」が用いられていた。「てもらえませんか」は大正期まであまり使われていなかった。江戸期には、「てほしい」が、明治・大正期には「てちょうだい」、昭和期に入り、「てほしい」「てもらいたい」が多用されるようになり、「ていただきたい」が現れるようになった。

第2章 誘い表現

「誘い表現」では、「およんなさいまし」「おいであそばし」「おいでなされ」「おいでなさい」等について江戸期から明治以降の変遷を明らかにした。また、同じ表現が用いられる「申し出表現」についても言及した。

江戸期には、すでに典型的な「誘い表現」である「ませう(ましよう)」が見られた。明治期の特徴と言える「遊ぼうちやありませんか」と「～うちやありませんか」という表現が見られた。明治期の「誘い表現」では、「てもらえませんか」より「てくれませんか」が多用されていた。「申し出表現」では、江戸期にすでに「ましよう」「ましようか」「てあげましよう」「～う(よう)」が用いられていた。自分の意思・意図を表す表現であるので話しかける表現として「誘い表現」に用いられていたと思われる。

第3章 勧め表現

「勧め表現」では、「たらしい」「てみらどうか」「るといい」「がいい」「することだ」「た方がいい」等について江戸期から明治期への変遷を調査した。また、勧め表現と同じ表現が用いられる「助言与え」についても調査した。

江戸期には「ませんか」型は「勧め表現」に用いられていた。江戸期には、上層では「がよろしゅうございます」が下層では「がよい」が用いられていた。明治・大正期には「勧め表現」には、「～方がいい」が多用されるようになる。「助言与え」でも目上には「がよろしゅうござります」、目下には「がよい」「がよろしい」と使い分けがあった。「直接的な助言」と「間接的な助言」がどの時代にも見られた。

第4章 指示・命令表現

「指示・命令表現」では、江戸期から平成期への「指示・命令表現」を調査し、その変遷を明らかにした。「指示・命令表現」を丁寧な言い方にすると「依頼表現」になるので、その関係についても調査した。その結果、どの時代でも丁寧さを表して「指示・命令表現」を「依頼表現」にしていた。平成期に近づくに従って婉曲表現「させていただきます」「させていただきます」等が多用されるようになった。江戸期には、「てくりやれ」「てくりよ」が使われていた。明治期に用いられていた「てくだされ」「お～くだされ」は、現在使われていない。

江戸期後期の「なさい」形から明治期には「ください」形、「がいい」形へと移行していった。明治期の「てくれい」は「てくれろ」へ移行した。

第2部 敬語表現

第2部では、文末表現の形式に着目して、その表現の使用状況・変遷を明らかにした。

「ます」は江戸時代から発達し、近代以降丁寧体として多用されてきた語で、「近現代日本語表現」にとっては極めて重要な表現形式である。特に、その表現が担う意味を中心に分析した。

第1章 「～させていただきます」

「～させていただきます」では、筆者が内省し考察した判断基準をもうけ、「させていただきます」について、

A 「させていただきます」を使用してよい場合（適切な使用状況）

- a. 聞き手に不利益になる場合
- b. 話し手がいいにくい場合
- c. 本来なら、許可をもらった方がよい場合

B 「させていただきます」を使用しない方がよい場合（聞き手が不快に思う）

- a. 聞き手にプラスになる場合
- b. 明確にわかりやすく伝達する場合
- c. 指示・命令をする場合
- d. 話し手が独自に行動する場合

上記のように分けて考察し、不適切な場合は、「いたします」に替えた方がよいことを示唆した。

史的変遷では、古典語では謙讓表現として、「していただく」が用いられていた。江戸期には、「させていただきます」の用例はなく、「てください」「くださす」が見られた。明治期の資料でも「していただく」は見られず、1900年代に「させていただきます」が見られた。大正期でもあまり見られず、昭和期に入り、「していただく」が用いられるようになったと言える。

第2章 「あそばせことば」

「あそばせことば」では、「あそばせことば」について「高貴な—あそばせことば」と「庶民の—あそばせことば」があることを示し、それが江戸期から現在に至るまでどのような変遷を経て現在にいたっているかを示した。また、「あそばせことば」は、女性語と言われているが「高貴な—あそばせことば」は、男性にも使われていることを示した。

婦人雑誌では昭和20年代には「あそばせことば」が見られなくなり、皇室記事では昭和30年代から「あそばせことば」が使われなくなったことを資料から明らかにした。

第3章 「ませんか」考

「ませんか」では、現在「誘い表現」に多用されている「ませんか」は、江戸期には、「勧め表現」「依頼表現」に用いられていたこと。そして、明治期に入り、「ませんか」が「誘い表現」に用いられていたことを確認した。20世紀に入り、「ませんか」が一般的表現として意識されるようになったと見られる。調査結果から女性より男性の方が「ませんか」を多用し相手に配慮していることもわかった。

終章 おわりに

対人的コミュニケーションにおける、相手を行動させる機能を有する表現に注目してきた。それは、ある行動を相手にとらせるという力をもつ言語表現はコミュニケーション機能として最も大きな力を持つものだからである。

本研究では、ある行動を相手にし向ける表現、また、敬語表現を中心に調査、分析、考察を行ってきたが、いささかではあるが、近現代の日本語表現の実態がより明らかになったのではないかと考えている。総括的に捉えるならば、現代に近づくにつれて間接表現、婉曲表現が多用されるようになり、人間関係が複雑になり、自己の意図を相手に伝え、相手が快く行動してくれるように、物事を伝達し、コミュニケーションを円滑に進めようとする現代人の言語表現が見てとれる。

江戸後期、明治期、大正期、昭和期、平成期へのコミュニケーション機能表現「依頼表現」「誘い表現」「勧め表現」「指示・命令表現」「許可求め表現」「申し出表現」「助言与え表現」の変遷と「させていただきます」「あそばせことば」「ませんか」に関する現代までの使用状況について明らかにすることができたと思われる。